

# 文芸OGネットワーク通信



Vol. 8

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1 共立女子大学文芸メディア研究室内  
文芸OGネットワーク 代表 脇田 静子 Tel/Fax 03-3237-2681  
発行 2008.2.23 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei

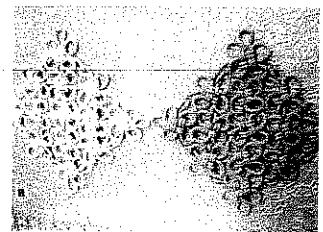
今年のテーマは「結」(リボン)。大きなピンク色のリボンの飾りが本館の玄関入り口の上に飾られ、華やかな雰囲気醸しだし、学園祭を盛り立てていた。

今年も、文芸学部の卒業生による「創作と展示」、そしてバザーを開催した。

創作と展示は、OG ネットのいわば柱であり、ふだんはなかなか見られない文芸の卒業生の活躍ぶりを、この共立祭の場で広くご紹介できることは、意義のあることである。今年「結」というテーマにふさわしく、染、織、組み紐の分野で創作活動を続けていらっしゃる3人の方の作品をお借りし、展示させていた

## 「共立祭2007」に参加

「共立祭2007」が、去る10月13日(土)、14日(日)の両日、学園を挙げて開催された。文芸OG ネットは、2003年の発足以来、5回連続の共立祭参加となった。



紗)を出品してくださった。

組み紐は、岡田侃子さん(S38年卒)の「花結び」という題名のついた作品であった。

薄桃色の組み紐で、今年の共立祭のテーマ「結」と「ピンク」を表している。岡田さんの作品解説に、「結ぶという行為は古代からあり、結び目には、魂が宿ると信じられてきた」とあるように、共立という母校で結びついた人々の思いが結集したような作品だった。

バザーも例年にも増して盛況だった。ご提供くださった方々に心から感謝したい。

今年の文芸OG ネットは、フェアトレード学生団体(2面へ)



ているというのが特徴だそうである。

寺田陽子さん(S35年

卒)による染色の作品は、ろうけつ染めを中心とした作品であった。

出品していただいた7作品の中で、「雪景色」は、雪深い山里の景色が染められたどこか懐かしい作品で、ウィーン南東地区芸術協会のクリスタル賞を受賞した作品である。ほかに「ふくろう」、「おしどり」、「極楽鳥」(更紗)、色の鮮やかな「天上花」、「ユートピア」、色調を抑えた「エジプト」(更

織物は、栗田紀子さん(S38年卒)の色鮮やかな作品であった。ルドン作「パンドラの箱」やキャンディスキーの絵を元にした作品、赤く美しい大輪の花を織り込めた横浜公園のチューリ



ポスター 左/今野さん 右/川瀬さん

(1面より)「やはらぎ」と同じ教室になり、空間を分かち合っの参加となった。4階ということもあり、多くのお客さんに来ていただくことができた。来てくださった方も

一部屋で二つの展示等を愉しんでいただけたのではないかと思います。また、「やはらぎ」の現役の学生の方々とも世代を超えた交流ができたのではないかと思います。

早く作品をお貸しくださった3人の方々に感謝申し上げるとともに、今後も卒業生の方々の創作活動や作品を共立祭でご紹介し、人々との「結」が築いていければと思う。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □

## 文芸サロン講座

2003年度に始まった「文芸サロン講座」。様々なジャンルから講師をお迎えし、充実したひと時を分かち合っている。今号は「文芸サロン講座」第4回と第5回についてお伝えしたい。

第4回 2007年3月10日

### 「聖徳太子の周辺」

講師  
東京大学名誉教授  
佐藤正英氏

2007年3月10日(土)この文芸サロン講座立ち上げのきっかけをご提案下さった佐藤先生をお迎えして、春の午後のひととき、「歴史とは何か」「私たちにとって過去の事実とは何か」を考えながら、聖徳太子と「仏法」についてお話を伺った。

倫理思想史の研究者の佐藤正英氏は仏教・神道を文化論として扱ってこられた。現今の実証史学は、聖徳太子のいない歴史を説こうとしている。太子に関する資料は『日本書紀』(巻第22、推古紀)に「厩戸皇子」として記載されているだけであって、説話を重ね合わせ語られてきた「太子像」にすぎず、『日本書紀』は国内外向けの政治的意図をもった編纂書であるから、というのがその理由である。明治以降の廃仏毀

釈や天皇制信仰は『記紀』に対する偏狭な解釈を生み出し、第2次大戦まで続いたが、そうした流れの中で聖徳太子や仏法の部分は封印され、余り読まれてこなかったが、今日、実証史学の名のもとに、政治的意図に基づく虚構にすぎないとしてそのまま、抹殺されようとしている。

『日本書紀』の伝えるところによれば、原初神道の「もの神(八百万の神)や「たま」神(もの神を祀る人の霊魂として現出した神)に対して、「蕃神(あだしくにの神)」である



釈迦仏は「たま神」の一人とみなされた。呪的な力やすぐれた知力を持った菩薩である聖徳太子によって、仏法の教説は、ひとびとにとって身近なものとなった。女天皇である推古天皇の皇太子として憲法十七条を述作して、在俗の菩薩から成る官人共同体の戒を提示したり、推古天皇の前で勝鬘経を講説したりするなど、仏法による人々の救済を広めるために太子は大きな役割を果たした。翻って言えば、日本の仏教史は太子の関わる説話からは

じまると言わなくてはならない。

以上、概略のみで、詳しくは先生の著書『聖徳太子の仏法』(講談社現代新書)を是非お読みいただきたい。

追記:昨年12月まで放映されていたNHK大河ドラマ「風林火山」をご覧になった方はタネ本の佐藤先生校訂/訳 武田家老臣である高坂昌信の筆録とされる『甲陽軍鑑』(ちくま学芸文庫)もご一読を!

佐藤正英氏の主な著書

『歎異抄論釈』(青土社)

『親鸞入門』(ちくま新書)

『隠遁の思想』(ちくま学芸文庫)

『日本倫理思想史』(東京大学出版会)

第5回 2007年9月22日

### 「染織文化財を科学する」

講師  
共立女子大学家政学部教授  
齊藤昌子氏

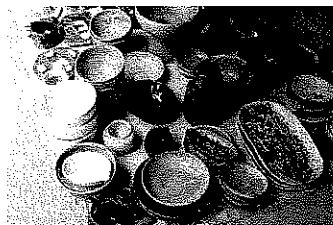
まず、会場に飾られた年代ものと思われる、それぞれ赤と紺を基調とした2領の陣羽織が眼を惹く。重厚にして華麗、保存状態も非常にいい。机の上には青、藍、紫、黄、朱などに染められた絹糸や赤の色見本が並べられている。「染織」のお話という場のムードが漂う中で先

生のお話が始まった。講師は家政学部教授齊藤昌子先生。先生は被服管理学、染織品保存科学がご専門で多くの研究論文や著作をもたれ、研究活動をされている。

今回の講座は、それらの研究の中から美術館に収蔵されている染織文化財が、どんな繊維で作られ、どのような染料、媒染剤が使われたかを分析をすることによって、染織を科学的に解明し、保存や修復にいかに関与するかという内容である。高度な内容にもかかわらず、パソコン活用の映像を駆使した、素人にもわかりやすい、興味深い、しかも先生の熱気が伝わってくる講義であった。具体的な講座内容は次のとおりである。

1. 染織文化財に使われた染料とその分析法
2. ルイ 16 世様式椅子セットの分

( 窯出したところ )



仙葉 弘子

幼い頃の泥だご遊びの延長のようなやきものづくりを、私はもう40年近くも楽しんでます。40年の間には様々な人生の難問に突き当たりましたが、その都度、やきものが土をこね形をつくり火を焚くことにより、私を力づけてくれたような気がします。

そもそもの始まりは、子ども達の小学校教師であった芳村俊一氏にPTAのサークルで教えを受けたことでした。氏は地質図を持って古窯の土やほぼ全国の土を焼いて標本作

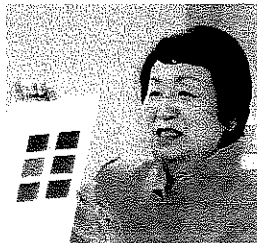
### 析と修復

#### 3.陣羽織の赤を探る

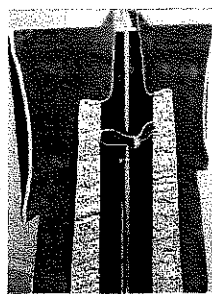
#### 4.アメリカンアンティークキルトの赤色染料

特に興味深かったのは、上の研究対象が共立女子大学所蔵の文化財であることと、先生ご自身が直接調査分析研究に携わられた事例ということにあった。

まずは使用された染料、特に赤色染料についての分類や分析法の説明があった。その上で具体的事例として、ルイ 16 世様式椅子はフランスで作られ、何回も修復された跡がみられること、加えて、この椅子がフランスから日本に渡り、本学に所蔵されることになった経緯など、科学



@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@



的のみならず、社会的背景を窺わせる説明があった。続いて、赤(猩々緋)の陣羽織の素材はヨーロッパ、東南アジ

ア、中南米からの輸入品であること、アメリカンアンティークキルトから当時のアメリカの家庭生活がわかるなど、文化的な視点からも関心がもてる講義であった。

最後に、現在本学の家政学部における染織研究はかなりの成果を上げており、今後染織品保存修復士の育成が必要であることなど、現状や将来の展望などを伺った。本学の所蔵文化財や家政学部の研究課題などを改めて知る良い機会を得たのであった。

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

りをされました。定年退職後は伊豆湯ヶ島へ転居され、その膨大な標本は「芳村やきもの資料館」に展示されています。

芳村氏は、やきものは人間が作る火成岩で、地球はもともと大きなやきもの作品だ、といわれます。30年前、海を隔てた大島三原山の噴火の時には、滅多に見られない地球師匠の窯焚きを目を皿のようにして見学し、火の色や光の輝きで1250度と目測され、人間の窯の温度とあまり違いがないと言われました。噴火の最後には1200度のドロドロの溶岩が流れ出し、三原山に釉薬をかけたそうです。

日本列島は主に海から隆起した海成層と火山による火成岩で出来ているので、大陸から文化として伝来したやきものの1250度という高温に耐えられる土は少ないのです。六古窯の備

前では田の土を掘り尽くして大池が出現し、最大量の陶土を持つ瀬戸も山が切り崩されていくつもの丘となり、ダンプカーが砂塵を巻きあげて往来する有様です。芳村氏はどんな土でもその土に適った温度で焼けば形になり、本来含まれている美しい色が現れると提唱されています。

芳村夫妻があい次いで病で亡くなられてもう3年になります。私たち弟子は研究会をつくり、氏が示された道を進もうとしています。会にはやきもの大好きな人々、リタイアされた色々な分野の方々、勿論若い芸術家や私のような主婦も参加し、土の研究、焚きの研究、窯づくりの研究に時を忘れる程です。

私は窯を持っていないので主婦仲間グループをつくり、(4面へ)

(3面より)公共の灯油窯を借りて年4回窯焚きをしています。10日間で素焼をし釉薬をかけ本焼をして仕上げます。公共の窯なので本焼でも9時から21時までの間に焚き上げなければなりません。温度計を見、火の色を見ながら、予想以上の作品が出来るよう祈りながら窯焚きをします。丸一日冷まして、まだ暖かい窯の前へ期待と少々不安と共にみんなで集まりました。さあ!いよいよ窯出しです。(S33年卒)

## 掲 示 板

◎総会・文芸サロン講座 5月に文芸OGネットワークの総会を開催します。多くの会員の皆様に参加していただける魅力ある総会にすべく、これまで3月に開かれていた文芸サロン講座を、総会と同時に開催することになりました。奮ってのご参加をお待ちしています。

◎共立祭 今年も秋の共立祭に参加を予定しています。企画等にご意見・ご提案がありましたら、お寄せください。

## 編 集 後 記

★「文字に書いた言葉より声に出したほうが思いは伝わる」とは、ある声優の体験からの言葉。

★今号では、文芸サロン講座を第4回分、第5回分あわせて掲載した。講師の先生方の声に込められた熱い思いを、文中から少しでも汲み取っていただきたい。(酒)

OGネット会員の有志が、週1～2回共立女子大3号館、昔の文芸学部建物の迷路のような廊下を歩いて階段を上った倉庫のような部屋に集まって、演劇公演に関するプログラムやチラシ等の整理を行っております。亡くなられた藤木先生を始めとする劇芸術研究室の先生方が丹精込めて集めた貴重なプログラム等で、それは段ボール数百個にも及びます。戦前戦後を通じた日本の演劇文化の貴重文献であります。その整理をOGネットがお手伝いすることになり、もう3年程経ちました。年代別に、劇場別に袋わけし、次は、パソコンでデータを投入するという先の長い仕事です。

宝塚劇場公演プログラムから、自分達が楽しんだタカラジェンヌの変遷を目にし感慨を深くしたり、また文学座、俳優座等からいろいろな劇団が生まれ育ち、また消えていった哀しい思いに浸ったり、我々ボランティアの年齢層が結構高く、若かりし頃の自分をダブらせては、皆で回顧談に花が咲き、仕事を一休みすることもあります。大げさに言えば、戦後の劇文化は、民主主義の礎と言っても過言ではなく、人々が生

きる喜び、悲しみをなんとか表現し、日本の明るい、平和な将来を願った、やむにやまれない知の叫びだったような気がします。それはまた、私たちの青春でもありました。戦後のどんよりした空気の中でどんなにか日本人の心を癒したことか。そのエネルギーは今も絶えず、お笑い文化に花を咲かせているのではないのでしょうか。そもそも人々が人々を前にして何かを演

## 資料整理に 参加して

じて楽しむという行為は、古代ローマ時代からあったものです。21世紀の現在も、世界のあちこちで古典劇、現代劇等様々な様式で公演されております。そう思えば劇文化は、人間社会の中で廃ることは絶対無いと言えるでしょう。ちょっと知ったかぶりをしました。

私は、西洋かぶれ者で、オペラは観るけど日本のオペラは観ないというような鼻持ちならない人ですが、定年になり時間を持て余していたところ、お誘いがあったあまり興味のない日本演劇の資料整理にしぶしぶ参加したので。勉強になりました。日本の

劇文化の豊かさを知り、機会があって生まれて初めて宝塚のレビューを見ました。驚きました。これは世界に誇る日本のレビュー文化です。しかも女性だけで全てを演じるのです。男だけで演じるバレエがありますが、女性だけで豪華絢爛な衣装・装置で、濃密に、一糸乱れぬ舞台はそう世界でも見られないのではないのでしょうか。アメリカ産ミュージカル「コーラスライン」には決して負けていません。一つ知らない世界をこの年になって知りました。

ひょんなことから始まった資料整理ですが、古い資料で少し手が汚れますが、これからはパソコンの活躍が主になります。パソコンが出来なくてもかまいません。打ち方さえ覚えればあとは同じことの繰り返しです。地方在住の会員の皆様には申し訳ありませんが、東京近郊にお住まいの方で、時間がおありの方がいらっしゃいましたら、このボランティアに参加してみませんか。ちょっと知の世界に身を置くのも心地よいものです。皆で心からお待ちしております。(村上智子)